

## 論 説

# 都 市 の 位 相 ( 4 )

水 口 憲 人

はじめに 都市の「偏在」と都市計画

・ルソー、ジンメルと都市

- 1) 都市の「主題」化
  - 2) ルソーと都市 (以上、『政策科学』11巻3号)
  - 3) ジンメルと都市 (以上、『政策科学』12巻1号)
- ・都市と自然 (以上、『立命館法学』302号)

・都市とコミュニティ

はじめに

- 1) コミュニティの夢 C・ペリー
- 2) コミュニティは「不作法」になる R・セネットとI・ヤング
- 3) コミュニティとしての都市街路 J・ジェイコブス

おわりに (以上、本号)

・都市空間・都市計画・都市政治

## ・ 都市とコミュニティ

はじめに

M・フーコーは、人々の調和や協働、相互理解で形作られる、統一し、自律した単位を、王権や特権団体、あるいは無秩序の暗闇の世界と対抗させる思考を「ルソーの夢」と名づける (Foucault, 1980)。そしてわれわれは、ルソーが、パリという大都市を嫌い、ジュネーヴという小さな都市国家に「夢」の実現を託したことを見た。都市という大きな器の悪に対して小さなコミュニティを賛美する思考も「ルソーの夢」の変奏といえるかもしれない。われわれの生活は、ルソーの時代のパリが何倍にも拡大した大都市というより大きな器を前提としている。器の大きさが悪の大きさに比例していると思なされる時、調和と協働、相互理解の小さなコミュニ

ティへの希求はそれだけ強まりうる。人々は何倍にも拡大したパリの中にジュネーヴを取り込もうとする。

だが都市は、様々な共同体的規制から人間を解き放ち自由にする。そしてジンメルは、都市のこのような自由が「他ならぬ自己」の個性的表現を可能にするし、人々のコスモポリタンな行動を生み出していることに注目したこともわれわれは先に見た。また彼は、都市は、空間的に最も近い人々への無関心と引き替えに、空間的にきわめて遠い人々と緊密な関係を結ぶという特有の心理を育むという。あるいは、何年も隣に住んでいる人の顔も知らないという大都市で起こりうる事態にも注目していた。彼の描く都市の人間は、「孤独にして自由」であった。われわれは、このようにいうジンメルから、都市では「ルソーの夢」は実現するのだろうかという疑問を引き出しうる。

都市とコミュニティをめぐる問題は、このようなルソーとジンメルを両極とする数直線のどこかに位置するのではないであろうか。以下の検討も、この数直線を念頭に置きながら進められる。

ところで、コミュニティという用語は、多義的であり、「地域」と一義的に結びつくわけではないが、それが「地域」と関連づけられて用いられる場合、少なくとも次の3つの意味が与えられているといえる。1つは、例えば特定の境界内の居住地を指すように、地理的に分節化された空間単位という意味である。2つ目には、この単位と結びついて展開する、住民の相互関係を織りなすローカルな社会システムという意味を帯びている。そして3つ目には、親密さや親近感、温かさや帰属感、さらにはパーソナルな相互理解等を体現した、住民の相互関係の特定の質という意味も持たされている。F・フーリエのファランステール、R・オーエンのニュー・ハーモニー村、E・ハーワードの田園都市等は、この3つのつながりをよく示している。親密さや温かさを生むローカルな社会システムを特定の空間単位で作りだそうとした彼らは、コミュニティを構想し、実現しようとしたともいえる(佐々木, 1971)。

ちなみに、3つの意味の類別はJ・アーリの示唆によるが、彼はコミュニティが、「イデオロギー」という第4の意味でも理解できるという。特定の関係をコミュニティとして理想化する言説が、あるものを覆い隠し、場合によっては覆い隠されたものを永続化する機能を果たすという意味で「イデオロギー」と名づけるのである(Urry, 1995)。

フーリエやオーウェンは産業革命期の都市の悲惨さを逃れて別の世界を作ろうとした。都市と農村それぞれの利点の合体を企図したハワードの田園都市も、前章でコルビュジェや関らに関連させて見たように都市からの逃避志向であった。彼らのコミュニティは、いわば都市の陰画とセットになって成立している<sup>1)</sup>。そして、このような論脈が輻輳される時、コミュニティの肯定は、都市の持つ可能性を覆い隠しかねないという意味でたしかに「イデオロギー」になる。だが同時に、この論脈の逆も「イデオロギー」になりかねない。ジンメルがそうであったように、都市はしばしば、共同体的規制から解放されたコスモポリタンの個人主義の成立基盤と見なされ、個人主義的自由の拡大の可能性が都市に託されるが、この論脈では、コミュニティは形を変えた共同体的制約として否定的に扱われる。それは都市とコミュニティの有りうるつながりから目をそらすことになるかもしれない。

本章の素材はこのよう「イデオロギー」であるが、特定の価値的立場から、ある言説を「イデオロギー」として裁断する、いわゆる「イデオロギー批判」を試みるわけではない。C・ペリー、R・セネット、I・ヤング、J・ジェイコブスの議論から、3つの「イデオロギー」ないし論理の型を抽出し、数直線上での相互の関連を検討することを通して、都市とコミュニティという主題へのアプローチを試みる。

ところで、そもそも都市にはコミュニティが成立するのだろうか。P・カヅィニッツは、20世紀アメリカの都市社会学は、このような問いから出発しつつ、現にあるコミュニティの存在を確認し、その解釈を積み上げてきた歴史を持つという(Kasinitz, 1995)。彼は、概要、次のようにその

歴史を述べる。

アメリカは、様々なエスニック・グループの移民が形成した社会であるが、1920年代、都市社会学を成立させたシカゴ学派は、このグループを単位にしたコミュニティとしての近隣関係は、せいぜい二世代でその重要性が失われていくだろうと想定した。都市化の進展にともなってジンメルの描く傾向が強まり、コミュニティの絆は無くならないにしても、その強度は次第に緩んでいくと見なしたのである。だが第二次大戦後、この想定は次第に不確かなものになっていく。コスモポリタンな個人主義の深化にもかかわらずコミュニティは執拗に存在したし、その理由を説明することが都市社会学の次の世代の課題になる。コミュニティを、いわばジンメルの世界と小規模な農村共同体の中間に位置づけた、M・ヤノヴィッツの「有限責任としてのコミュニティ」(community of limited liability)はその解答の代表である(Janowitz, 1952)。彼は近隣住区としてのコミュニティは、都会の人々の日常生活に引き続き重要な役割を果たしているとする。だが農村のコミュニティと都市のそれとが異なるのは、都市ではコミュニティに深く関与しているのはすべての住民ではないし、関与も、自発的、限定的であり高度に条件的であるという。そしてその後、ヤノヴィッツこのような見方が共有されつつ拡大され、例えばG・サトルスは、近隣住民の連帯意識が高まる条件の不確実さを強調するが、特に彼は、外部からの「侵入」や「攻撃」がコミュニティに境界意識やアイデンティティを覚醒するという条件を指摘し、いわば「アイデンティティの政治学」としてのコミュニティに注目した(Suttles, 1972)。そしてこの政治のモメントは、70年代の都市のコミュニティを舞台にした紛争を背景にして、さらに強調されていく。コミュニティの連帯意識の形成は、その意識に機能的意義を与える政治的環境にかなりの程度左右されるというのが、J・ベンスマン=A・ヴィディチの観察であり(Bensman=Vidich, 1975)、カゾィニッツによれば、コミュニティの集合的アイデンティティや不満の基礎には政治があるというこの観察は、80年代以降も継承されているという。ちなみに

「都市の中のムラびと」(urban villagers)というユニークな造語を作りだしたH・ガンスの業績も都市とコミュニティという文脈では重要であるが、彼の「ムラびと」はいわゆる田舎者ではない。都市的生活様式が、ワースのいうように密度、量、異質性という変数で決まるわけではないとした彼は、近隣の規模でも決まるわけでもないとしていたし、近隣がコミュニティ意識を醸成するのは、メディアや政治の力であり、外部からの攻撃であるとしていたのである(Gans, 1962)。

そして都市コミュニティの存在を確認し、その理論的含意を探ろうとする志向は、わが国の社会学にも見られる。都市のコミュニティを対象とした実証研究を積み重ねてきた奥田道大は「都市コミュニティは、20世紀システムの都市社会とは長い道連れ(long engagement)の関係にあった」と述懐する。さらに彼は、「都市コミュニティが社会学的意味での「都市」とは何かへの問いのモデルとして正当に位置してきた否か」が、検討されるべき課題だとする(奥田, 1999: 258)。本稿も現にあるコミュニティへの3つのアプローチを識別することにより「都市」に接近しようとする。

#### 1) コミュニティの夢 C・ペリー

ペリーの『近隣住区論』から始めよう。彼はハワード等の都市からの逃避指向に対して、都市の内部に近隣というコミュニティが成立すると考えた。都市になぜコミュニティが成立し、かつ必要なかという問いに答えようとした一人である。

この書の訳者が注記するように「都市計画やコミュニティ計画の関連書ならほとんど例外なしにペリーの近隣住区論に論究している」(ペリー, 邦訳: ii)といわれる彼の著作は、1929年、ニューヨーク大都市圏の調査研究シリーズの第7巻として公刊されている。ニューヨーク大都市圏の地域計画協会(Regional Plan Association)がこのシリーズに関与し、この協会には、後に都市の思想や都市計画に影響を与えるマンフォードやF・ライトたちが加わっている。またペリー自身は、セツルメント運動の系譜

を引くコミュニティ・センター運動に従事した経歴を持つ。そして1920年代は、『近隣住区論』もその成果を踏まえようとしている、都市社会学のシカゴ学派が形成された時期でもあった。コミュニティを都市社会の秩序形成と都市計画との結び目として捉えようとする本書の特色は、都市の大都市圏への広がりという趨勢や、都市が改めて学問的にも注目された時代を背景として生まれている。

本書には、「近隣住区」は「地域コミュニティ」(local community)と同じ意味を持たせた用語であるという指摘もあり(Perry, 1998: 116)、以下でもコミュニティという用語を使うが、まず彼が、都市がコミュニティを必要とする根拠や成立条件をどのように捉えていたかを、次の3つの論脈に沿って見ておこう。

最初は、自動車という急速に普及してきた交通手段への注目である。自動車は道路網を作りだし、都市は道路網で仕切られた細胞状の都市になりつつあるが、とりわけ幹線道路は、居住地を激しい自動車の流れによって相互に関係のない小さな孤島に分断している。このような事態は、例えば自動車道を横断しなくてよい児童公園を作ることを人々の要求にする。コミュニティづくりとは、この細胞内部の生活の組織化という意義を持つとする彼は、その意味でコミュニティとは「自動車によって強要された定義」であるという。テクノロジーの絶えざる変化や発展は都市の特徴である。それは人間に便利さとともに脅威や厄災をもたらす。彼のコミュニティ論は、自動車に代表されるテクノロジーが作りだした条件を逆手にとり、それを「居住地の生活上の利益」に変えていこうとする。「自動車の脅威は、近隣地区の概念を明瞭にし、それを標準化していくことを避けがたい要求にする。それは不幸に見えて実はありがたいことなのである」(ibid., 31)と述べる彼にとってコミュニティとは、テクノロジーの変化に対応した都市的条件を組み替える作為だったのである。

彼は、農村コミュニティをモデルにして都市のコミュニティを考えている。それは労働の場と居住の場が近接し、ほとんどの人々が相互に知り合

い、濃密なコミュニケーションを基礎にして地域の必要や要求についての世論が形成されやすい「自然な政治的単位」としてのコミュニティである。だが都市は職と住を分離し、このような「社会の伝統的な綱目」を破壊していく。あるいは都市は、例えば、日々の拳動が、隣人の好奇心や噂の対象になるという理由でコミュニティを避けたがる若い独身女性のような多様な生活スタイルを助長し、この面からもコミュニティの成立条件を危うくしていく。しかしペリーは、このような都市だからこそ、「市民的徳性」(civic virtues)を育む基盤が必要だとし、「フェイス・トゥ・フェイス」のコミュニティづくりをそのための課題に設定したのである。彼はコミュニティを作るためには2つの「局面」があるという。一つは、生活の水準や手段が似通っている人々を集め、共通の関心を助長するよう協働することを促すという局面であり、もう一つは、様々な近隣サービスを相互に、またコミュニティ全体と関連づけ、維持し改良することであり、そのための社会集団や協働関係の形成が、自然かつ不可避的になるよう工夫することである。このように、この論脈でもコミュニティは、都市的条件を組み替える作為とされるが、第1の論脈が自動車が生んだ空間の物理的編成への対応であったのに対し、この第2の論脈では協働や共通の関心を生む人間関係の組み替えが企図されている。

だが、なぜ人間関係の組み替えが必要なのか。彼はコミュニティの「社会的価値」という論点を設定し、社会心理学のいう「第一次集団」の機能や、コミュニティをベースにした政治参加の意義を強調することによってこの問いに答えようとする。スラムが第一次集団の機能を説明する例として挙げられている。彼は、社会の遺棄物が流れ込んでくるスラムで発生する非行は、単なる住宅計画で無くせるわけではないことを認める。それでもそこに協働的なコミュニティ環境が生まれることは、子供たちが非行に走りギャングになっていく余地を少なくしていくとする。「フェイス・トゥ・フェイス」の人間関係を育むコミュニティは、子供が市民に成長していく基盤になる第一次集団の役割を提供し、社会病理の防波堤になりう

ると考えるのである。第一次集団は、現代風にいえば「親密圏」である。彼のコミュニティは、コミュニティを避ける若い独身女性ではなく、子供を中心にした家族相互の「親密圏」で構成されているが、当時有名であったシカゴの、スラムとギャングと子供の非行との関連は、「親密圏」のような「環境が欠如している場所は、悪条件にあるということが自然に理解される」好個の例になりえたのである (ibid., 127)。そして彼は、コミュニティは、都市、とりわけ大都市の中で「政治の健全さ」を確保し、「市民の義務」を果たしやすくするという点でも「社会的価値」を持つという。大都市は、分業や役割関係の網の目を作りだし、それらは人々をお互いに結びつけることが困難な集団として分離していく傾向がある。人々はこのような集団間の裂け目の中で、自分と同じような階級、信仰、職業の人たちとだけ交流し、また、昼間は居住地から遠く離れたオフィスで過ごし、勤務時間外も、居住地外や家族と離れたところで過ごしやすい。このような状況が、人々の政治に対する見解を狭くし受動的にする。それが「われわれの大都市の広範な人々が、市民の義務を有効に果たす機会を殺ぎ、利己的なマシーン政治に活躍の機会を与えている理由である」(ibid., 125)。だが人々が、集団の垣根を越えてインフォーマルで親密な近隣関係を織りなすコミュニティでは事情が異なってくる。住民は他の集団に属する人々との交流を通して自分の政治的意見を検証し確かめていく。政治や政治家の行動は地域に発生する問題や必要に照らして判断されるようになる。「市民的関心事への実質的参加のためには、個人は、単に年に一度か二度の投票にとどまらず、もっと多くの機会を必要としている」が (ibid., 126)、「フェイス・トゥ・フェイス」のコミュニティは、自発的な協働によって政治への関心を持続させ発展させる「自然の方法」なのである。ともあれ都市がコミュニティを必要とする第3の論脈はこの「社会的価値」に見いだすことができる。

本書の大半は、近隣住区としてのコミュニティを標準化するための、建築学的・都市計画論的検討に充てられている。すなわち、規模や境界や密



度、公園やオープン・スペース、コミュニティ・センター、街路体系等を、商店街、郊外地域、工場地区、都心の荒廃地域等の特色とクロスさせながらコミュニティづくりの基準を提示しようとしているが、このような技術的議論も、都市だからこそコミュニティが必要だとする上述の論脈に支えられていたのである。

ちなみにペリーの都市計画観は、例えば、機能の壮大な体系をトップダウン的に構想するコルビュジェのそれと対比すれば抑制的である。ペリーは、単なる住宅計画では改善できない社会問題には、当然のことながら近隣住区という住宅計画論も寄与するところが少ないと述べる。あるいは最良のコミュニティ環境の中にさえ見られる社会的不適応にも、コミュニティ計画は十分な対応ができないという。それでも彼は、近隣住区の特定のパターンに沿って特定の「人間行動の鋳型」が生まれると考える。つまり彼は、建造物の空間的配置の有りようが人間行動に影響を与え、それが社会秩序の形成に資するという、多くの都市計画家が核心部分で抱く都市計画への役割に、信頼を寄せるのである。

ルソーは、自由を支配と服従の一致だと考え、小規模な空間単位がこの自由を可能にすると想定していたといえる。彼はジュネーヴをそのようなものとして賛美したが、それはいわば、「親密圏」と活発な政治参加を内実とするコミュニティであった。だが都市が大都市へと規模を拡大するにともなって、このような自足的な空間はその成立根拠を次第に危うくしていく。しかしこのような趨勢のゆえに人々はかえって、大都市の中にコミュニティという夢を求めようとし、大都市内部の狭域自治の条件を探ろうとする。ニューヨークという大都市が、大都市圏へと拡大していく時代を背景にして、都市にもコミュニティが成立するし、それは望ましいことであると主張することによって、人々のこのような要求に応答した『近隣住区論』は、大都市の中にジュネーヴを取り込もうとした先駆的業績であった。だがルソーのジュネーヴと異なって、ペリーの大都市内コミュニティは、フィジカルな空間配置の操作によって誘導される「人間行動の鋳

型」が作りだす人為の産物であった。

ペリーは、テクノロジーの進展と都市で生まれる独自のライフスタイルに注目し、そこにコミュニティが成立する意義や根拠を見いだそうとした。都市の新たな可能性とコミュニティ双方に正の価値を付与し、両者をつなげたのである。そして、「コミュニティ計画の系譜」を活性化し(佐々木, 1971),「人間のための都市」に「小さな区域」を活用しようとする都市計画家たち(ペーターズ, 1978)をはじめ、実践家たちの多くは、親密圏、政治参加や協働の「自然」な単位、計画によって形成可能なユニット等で構成される彼のコミュニティイメージをどこかで意識しつつ「コミュニティづくり」を行ってきたのである。

## 2) コミュニティは「不作法」になる R・セネットとI・ヤング

ペリーのコミュニティ論が数直線の一方の極とすれば、以下で検討するセネットとヤングの議論は、その対極に位置する例となる。彼と彼女は、ペリー流のコミュニティは、「他の人々を人間として知らねばという強迫観念なしに、人々と共同することが意味のあるものになるフォーラム」であり「人間の可能性を経験させる中心」(Sennett, 1976: 340)たる都市の意義を縮小させるのではないかという疑問を投げかける。親密圏、協働、政治参加、フィジカルな計画が作りだす「人間行動の鑄型」というコミュニティの意義の強調は、一見、都市を肯定しているかに見えて、実は人間にとっての都市の可能性に目を背け、さらには敵対しているのではないか。これが彼と彼女が立てる問いである。

19世紀の市民社会には、人々の生活関係の中に歴然と存在していた公共性が、個人や家族関係、パーソナルなものやプライベートなものに取って代わられたことに現代の問題を見ようとするセネットの『公共性の喪失』は、分析の素材を演劇や文学、政治、メディア、消費活動等とともに、都市における人間行動に求めているが、その最後の部分でコミュニティの問題を取りあげている。「コミュニティは不作法(uncivilized)になる」、

「親密さの専制」はこの部分の章題の一部であるが、この章題が示すように彼はコミュニティに批判的な距離を取ろうとする。ここではペリーに対応させて、都市計画、親密圏、政治の単位としてのコミュニティという論点を見ておこう。

セネットはコミュニティに関心を寄せる都市計画家に手厳しい。コミュニティ作りの「都市計画が、より親密なものを作りだすことによって生活の質を向上させようとするとき、計画者の人間性の感覚そのものが回避すべきだと命ずるはずの、不毛な状態を作りだすのである」(ibid., 312)と述べるし、都市計画家たちが、都市内の小地域でのコミュニティ意識の形成を語る時、それは「全体としての都市に意味のある公的空間と公的生活を再び覚醒すること」に反対する「軽率な火遊び」だという(ibid., 309)。ペリーのいう、都市計画家たちによって操作され誘導される「人間行動の鑄型」という思考や実践にラディカルな異を唱えるのである。

彼は都市空間の公的性格は、一つの区域に多くの機能が重ねられることによって生まれるという。だが現代の都市は区域の細分化をもたらし、都市計画家たちもこの細分化に手を貸してきたとする。彼らが行ったことは「そこでの機能の多様性を破壊し、空間の利用者の変化に応じた空間の利用への変化ができないように設計すること」(ibid., 297)で「全体としての都市」の公的性格を廃することに与してきたと見る。したがって都市計画家によるコミュニティの強調は、一つの逆説である。なぜなら自らも手を貸してきた公的空間破壊のコストの回収を、親密な人間的接触の回復というコミュニティに託すからである。都市という「大きな公的世界」が空疎で住みづらくなっているとき、小さな地域コミュニティを守ることはできなくてもそれが何故非難されるのか。これがコストの逆説的表現であるが、彼は、この逆説は、自らも空疎にすることに与した都市に、コミュニティを対立させ、「われわれにはそのより大きな世界(=都市)を住めるようにするしか選択はない」(ibid., 296)ことに目を向けない論理であるとみなす。

都市計画家たちの言説や実践に投影しているのは、人間の経験の規模を小さな親密圏を中心に捉え、局地的な狭い地域を「道徳的に神聖なもの」にする特定の間人関係の理想化である。なぜ親密圏の理想化が批判されるべきなのか。親密圏としてのコミュニティの賛美は、「人間は未知のものと出会う過程を通じてのみ成長する」ということを見失っているからである。利益や好みや機能の多様性を社会的経験として学習しうる都市は、未知との出会いの条件である。大きな都市の「空疎さ」に対して、小さなコミュニティを賛美することは、「見知らぬものや人は、慣れ親しんでいる考えや常識だとみなされている真実をひっくり返すかも知れないが、未知の領域は人間の生活で積極的な機能を果たす」(ibid., 295)という、都市が与える学習の可能性を殺ぐことになる。未知なものに対する恐怖は、人間にとっての単純な衝動かも知れない。だがこの衝動を分かち合うことで形成されるコミュニティは、この恐怖をかえって強化するという役割を担い、「大きな公的世界」たる都市に対して「内から築かれたバリエード」になりうるのである。そしてこのバリエードは、コミュニティの触れ合いが、「都市の社会的死に対する解答」であるかのように思いこむことによって作りだされる。

またこのコミュニティは「真の人間関係は個性の個性への開示」にあるという信念で支えられる。パーソナルな事柄を開示しあえることが、親密さであり真の関係であると見なされる。だがこの関係に沿って人々が社会的になるのは、お互いがお互いから保護されているときだけである。保護のために外部や未知のものに対して障壁や境界が作られる。コミュニティはこの障壁や境界である。「われわれは一つのコミュニティである。われわれは真実である。外の世界はわれわれの在るあり方でわれわれに応じていない。したがってそれは何か間違っている。それはわれわれの期待に背いてきた。したがってわれわれはそれとは何の関係も持たない」(ibid., 300) 「全体としての都市」に対抗してコミュニティを創出しようとする試みは、このような心理的価値を社会関係へと変えようとする試みで

ある。

さらにコミュニティは相互監視機能を持つ。その「純粋さ」にこだわるがゆえに、外部と接し、吸収し、自らを大きくしようとはしないコミュニティは、障壁や境界を守るために、成員のパーソナルなものやプライベートなものにも相互に監視の目を向けていく。コミュニティは、パーソナルな開示を可能とする関係を求めながら、そのためにお互いの「不純物」をコントロールしようとする矛盾した役割を演じている。

都市は非パーソナルな関係の集合である。都市の可能性や公共性は、パーソナルな開示のための障壁を設けることではなく、障壁を取り払い、非パーソナルな関係相互の距離としての「公共性」を推し量ることによって開かれる。親密圏としてのコミュニティの賛美は、このような都市と、その公的性格の理解を歪めることによって「不作法になる」のである<sup>2)</sup>。

以上のようにセネットは、都市計画家たちの言説や実践を素材の一つにしなが、親密圏としてのコミュニティのネガティブな像を描くが、コミュニティが政治の単位として有効であるという主張にも懐疑的である。

都市計画家たちは地域を区分し、区分されたコミュニティに自らを支配できる決定権を与えようとする。あるいは、コミュニティが何かを変える固有の力を持っていると信じている。だがコミュニティが実際に持っている「本物の権力」はない。それは高度に相互依存的な経済や社会の下で、地域の事柄についての地域の決定は幻想になりやすいということにとどまらない。コミュニティ独特の行動様式が、権力の有効な利用の制約条件にもなりうるからである。コミュニティは、外部との関係で何かの問題に直面すると、共通の態度を作りだし共通の外見に基づいて行動を始めるが、次第にその態度そのものを信じ込み、それに固執し、それを守り始める。それは権力をめぐるゲームの中での戦術的な態度選択ではなく、自分たちやコミュニティが何者であるかの「真の定義」へのこだわりである。政治が心理に取って代われ、コミュニティはゲームの中で孤立する。セネットは、このよう事例として、後にニューヨーク州知事になる弁護士M・ク

オモのフォレストヒルズの紛争の調停記録を引く。紛争は中流ユダヤ人コミュニティであるフォレストヒルズに、低所得者向けの公営住宅を建設する市の計画に対するコミュニティ側の反対運動として生じた。

フォレストヒルズのコミュニティは、自分たちの現在の主要な武器が、過去数ヶ月前と同じように、市の有力者や一般の人々に、コミュニティの側からの寛容や容認を期待するのは無理だと説得することだと確信している。このために彼らは力と抵抗を誇張するのである。そして当初は一部、ポーズであったものが自閉的な姿をとって自己増殖し、ついには幻想が現実となる。……フォレストヒルズの住民は、以前には信じている振りをしていたものを信じていた (ibid., 307)。

(強調, セネット)

さらにコミュニティが、例えば市当局との紛争関係に陥ったとき、誰が「真の」コミュニティを代表しているかをめぐり、コミュニティのアイデンティティや連帯、支配のありようについてコミュニティ内部で激しい争いが起こりうる。この争いはコミュニティメンバーを夢中にさせることによって、コミュニティを疲労させ断片化する。このようなコミュニティが、実際の権力を持っている市当局と直面するとき、その「本物の権力」は幻想性が顕著になるのである。

セネットは、コミュニティを都市における権力のゲームの「生態学」の中で捉える、政治学者N・ロングの見解を肯定的に参照する。それはコミュニティの政治力を、コミュニティ外の権力とのゲームの関連で定義しようとする観点である。「ポーズ」や「振り」、あるいは演技としての「真の」コミュニティも、このようなゲームの一定の条件下では政治力を発揮しうる。だがセネットは、信じていた振りをしていたものを信じ込ませる、同質的な親密圏としてのコミュニティの行動様式が、このようなゲームの可能性を狭めてしまうことに注目したのである。

ともあれセネットのコミュニティの捉え方は、都市計画家たちによって操作され誘導される「人間行動の鋳型」としてのコミュニティ、協働関係

の形成が自然かつ不可避になるような親密圏としてのコミュニティ，さらには，コミュニティは都市の中で「政治の健全さ」を確保し，「市民の義務」を果たしやすくする「社会的価値」を持つという，ペリーのコミュニティ観念に対抗して冷ややかである。

「今日の常套句では，都市は空疎な没個性の究極のように見なされている」。都市の没個性に対抗して共通の自己を作るためにコミュニティをつくらねばならないという「コミュニティ欠如の神話」は，「人々が，都市的であることの本質を破壊しながら道徳的に自らを正当化する」機能をはたす。「都市的であることの本質は，人々が同じであることを強制されることなく，ともに活動できることなのである」(ibid., 1976; 255)。こう述べる彼は，コミュニティと「人間の可能性を経験させる中心」たる都市を対置したのである。

ヤングは，セネットのいう「未知のもの」や「外部」との接触による学習，あるいは「同じであることを強制されないこと」を「差異」の承認と言い換えることによって彼と同質の議論をする。

差異や多様性を認め，他者を受け入れる「正義」のありようが彼女の関心である。この関心から彼女は，コミュニティに「一つのまとまった社会，調和，安全，確固としたアイデンティティ」という夢を託すコミュニタリアニズムをはじめ，コミュニティの擁護者たちを批判の俎上にのせる(Young, 1990)。

親密さや友愛が人間にとって大切なことはいうまでもないし，それらはしばしば小さな集団や同質的なグループが提供することも事実であるが，人間にとっては相互の差異を認め合う関係もそれに劣らず大切である。このように述べる彼女は，親密さの価値を認めることと，この関係に特権的な位置を与え社会全体のモデルとすることは自ずと別であることを指摘し，親密さやアイデンティティの共有自体が目標にされるとき，差異を認め合うことが視野の外に置かれやすいことを強調する。集合的アイデンティティとしてのコミュニティの理想化から彼女が読みとるのは，差異に対し



て排他的になり、異質なものを排除する論理の内在である。コミュニティの個性の自己主張は、それ自体は差異を表現する一つの有りようであるが、コミュニティの理想化は、他のコミュニティの個性を差異として承認する視点の欠如、すなわち、コミュニティ相互の関係の中で自らを捉える関心が欠けていることを特徴としているという。コミュニティが「よき社会」のモデルとされるとき、このモデルは、「小さなコミュニティが相互にどのような関係を持っているかという問いを完全に不問にしたまま定式化されやすいのである」(ibid., 234)。そしてこのような態度が、排他性や排除という「深刻な政治的帰結」を生みうるとするのである。

さらにヤングは、この「深刻な政治的帰結」はコミュニティの理想化と参加民主主義の賛美が安易に結びつくことによって現実化すると考える。多くの参加民主主義者は、直接民主主義が可能になる小規模の地域コミュニティに、決定権限を分権化することを望ましいものとしてきたが、彼女は、分権が「自律」や自己決定として理解され制度化されるとき、それは排他性や排除の手段になりうるとする。そして「自律」に代わる「エンパワメント」を提案する。「エンパワメント」は、コミュニティが外部との関係構築を通して自己の個性を発展させる多様なリソースを持つことだと見なしてよいが、それは、他者や外部を決定や活動から遠ざけ排除しがちな「自律」という観念の閉鎖性と対比され、その開かれた性格が強調される。この対置はセネットが「真の権力」観念の逆機能や幻想性を、権力のゲームの「生態学」との対比で捉えようとしたことを想起させる。

加えて彼女は、「コミュニティへのアピールは、通常、反都市になっている」という(ibid., 236)。都市がネガティブに描かれるとき、それは、無秩序、暴動、群衆、危険、不道德、逸脱、異常、陰謀、犯罪、人工性、冷淡、不健康等と結びつけられやすいが、コミュニティの規範化は、多かれ少なかれこのネガティブな都市理解を前提にし、この種の諸悪からのシェルターとしてのコミュニティが肯定されているとするのである。セネット同様、彼女も、コミュニティの賛美が都市の否定的な扱いとセット



になっていることに目を向ける。そして規範化されたコミュニティへの対抗規範を端的に「アーバン・ライフ」と命名する。それは、コミュニティの肯定と都市の否定を逆転させ、コミュニティの賛美論が見ようとしなかった都市の可能性を取り出す試みである。彼女の捉える都市は、排除のない社会的差異、多様性、エロティシズム、公共性、という少なくとも4つの社会関係の条件を提供することによって、「アーバン・ライフ」をコミュニティとは対極の規範たらしめるという。

排除のない社会的差異としての都市とは、例えばゲイやレスビアン、特定のエスニック・グループ等を、それらのサブ・カルチャーを容認し受け入れる多様で重層的なネットワークでありうる都市の可能性への注目である。また都市は、多機能の複合した社会空間であり、それは多様なものとの触れ合いを通して人間の活動が充実する条件になる。そして都市では人々は、新奇なもの、非日常的なものに遭遇し、驚き、興奮し、魅せられる経験をする。彼女のいうエロティシズムとはこのよう意味での都市である。さらに都市は、オープンであることによって多様なものが接する公共の空間である。広場や公園や街路は、多様なものの共存と触れ合いが形成する公共空間としての都市の象徴である。「よき社会」のモデルとしてのコミュニティの規範化は、このような「アーバン・ライフ」に向かって開かれた回路を内在させていないがゆえに、批判の俎上にのせられたのである。

「アーバン・ライフ」はセネットのいう「人間の可能性を経験させる中心」としての都市をより具体的に言い換えたものと見なしてよいが、いずれにせよ彼と彼女は、ペリー流の都市とコミュニティという問題設定が、都市対コミュニティという対置の下に都市を貶価しているとし、その論理を逆転しようとしたのである。

### 3) コミュニティとしての都市街路 J・ジェイコブス

寛容さ、すなわち、しばしば肌の色の違いに由来する差異以上に大きな差異となる近隣間の大きな差異に余地を残しておくこと、これは、

密度の濃い都市生活によって可能にされるし、またその常態であるが、郊外や準郊外ではあまり縁のないことがらである。またこれは、文明化され、尊厳と慎みを基本とした関係の下に見知らぬ人々が、共存して住める装置が都市の街路に組み込まれているときに可能になり常態になる(Jacobs, 1961: 145)。

これは、ヤングが引用するジェイコブスの『アメリカ大都市の死と生』の一節である。差異を許容し多様性を育むヤングの「アーバン・ライフ」は、ジェイコブスの都市理解を典拠の一つにしている。だがヤングは、引用後半部分の「街路」もコミュニティであるというジェイコブスのアイディアに十分な意を払っているわけではない。以下では街路もコミュニティだと考えるジェイコブスの議論を見てみよう。それは都市の諸悪のシエルターとしてのコミュニティ論ではないし、都市を肯定するためにコミュニティを否定する議論でもないという点で上で参照してきた二つの論理と異なっている。なお、彼女は「近隣」を本稿の「コミュニティ」に相当する用語として使用しているが以下では双方を互換可能なものとして扱う。

上の引用が示すようにジェイコブスは、郊外を寛容の余地が乏しい閉鎖的な同質社会と見なす。それは、白人ミドル・クラスで構成される郊外自治体が、ゾーニング等の「自己決定」権限を行使し、低所得層やエスニック・マイノリティーを排除していた当時のアメリカの現実に根ざしている。そして「近隣」という用語は、都市の中にこのような郊外の「まがいもの」を作りだそうとする意図を孕んでいるために、感傷的であるのみならず害のある用語になっているという。さらに都市内のコミュニティは、フィジカルな空間配置の操作によって設計しうるというペリー流の都市計画も次のように揶揄する。「学校、公園、小ぎれいな住宅等々が、良き生活が良き近隣を作る要石になるという想定が流行っているが、もしこれが本当なら人間の生活は何と簡単なものだろう。単純でフィジカルな良きものを与えることによって、複雑で手に負えない社会をコントロールできるという考えの何と魅惑的なことか」(ibid., 113)。

この種の警戒感や揶揄を通してジェイコブスが主張するのは、多くのコミュニティ論が目を向けない、近隣が、何をどのように「都市そのものの中で有用な」ことを行っているかに注目することであり、とりわけ、都市における自治の角度から近隣の問題を検討することである。彼女の「自治」は「フォーマルにもインフォーマルにも社会を自らの手で管理していることとする広義の意味」(ibid., 114)で使用されているが、この自治のために要求される条件や技術は当然、都市と小さな町では異なる。したがって、都市と自治とコミュニティの関係を検討するためには、「近隣が自己充足的な自律した単位という理想を捨て去る」(ibid., 114)ことから始めなければならないという。次に見る、都市全体、街路、準都市規模の「地区」(district)という3層で自治の単位としての近隣を捉えるユニークなコミュニティ論は、このような関心に根ざしている。

一般の用語法とは異なるとしながらも、彼女はまず、都市全体を近隣だと見なそうとする。「われわれは都市の小さなコミュニティのことを考えることによって、この大きなコミュニティのことを忘れてはならないし軽視してはならない」(ibid., 118)。都市全体を近隣だとするのは、自治の観点から見れば、最も多くの行政的、政治的決定がなされる単位であるということにとどまらない。様々な集団や利害が交流し関係を取り結んでいく単位でもあるからである。このような関係は近隣のそれに比せられる関係であり、「諸利害を持つ諸集団が関係を取り結ぶ一つの都市全体というものは都市の最大の財産の一つである」(ibid., 118)という。ちなみに、都市は通常、ゲゼルシャフトと見なされるが、先に触れたように、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの対比で知られるテンニエス自身は、都市を単純にゲゼルシャフトとして描いたわけではない。もう一度彼を引けば、「都市を構成している個々の団体や家族は必ず都市に依存しているという点からすれば、都市は、たとえその経験的な成立過程がどのようなものであるにせよ、その本質上全体とみなされなければならない」とされていたし、「都市の自然的な諸現象の基礎をなしている理念によれば、都市もま

た自給自足的な世帯であり、ゲマインシャフト的な生命を有する有機体である」と考えられていたのである。彼女の見方はこのようなテンニエスにつながる。それは、利益や機能というゲゼルシャフト的關係を軸にした都市も、その全体は一つのゲマインシャフト的性格を持つという視点である。

ジェイコブスは、異質なものを受け入れ多様性を容認する公共空間としての都市の象徴として、しばしば街路や歩道に言及するが、その近隣としての機能にも注目する。もちろんフィジカルな施設としての街路がそのまま近隣になるわけではないが、街路によって条件づけられた生活と仕事の空間の中で、小規模なネットワークが幾重にも形成され、それが自治の機能をはたす近隣になりうることを指摘する。このネットワークは、例えば、街路やその周辺で発生する犯罪の、自然に形成された防止や監視装置になる。あるいは、子供たちが遊び成長し、都市の中に同化していく空間を支える信頼と社会的コントロールの関係である。さらにこの近隣は、近隣で扱うには大きすぎる問題が発生したとき、都市全体、次にみる「区」、あるいはその他の集団から援助を引き出す単位になりうるという意味でも自治の機能を持つという。そして実際には、街路による境界が、その近隣の社会的属性と結びついて、孤立した近隣を生んでいるケースがあるとしても、商業活動が活気を呈し、用途や興味の多様化の工夫がなされている街路は「街路の自治」の現実と可能性を示しているという。

「区」は都市全体と街路を媒介する近隣の単位である。このレベルが必要とされる理由は、街路はほとんど固有の権力をもたないのに対して都市全体は、圧倒的な権力を持つからである。媒介とは、都市全体の有するリソースの一部をそれを必要とする街路へ配分する援助をすることであり、街路の経験や問題を都市全体の政策や目標に反映させる役割を担うことである。そのためには、都市全体たる「市当局に戦いを挑みうる大きさと力」を持つことが必要である。彼女は「区」に相当する現実の制度がこの機能を不十分にしかはたしていないことに鑑み、また、「区」の仕事は市当局と一戦を交えることだけではないにしても、街路と都市全体とをつな

ぐ「大きさと力」を持った「区」という近隣のレベルを設定する必要性を強調するのである。

都市全体、準都市規模の地域、そして街路に近隣という用語が当てはめられるケースは希である。このようなユニークな用語法を使いジェイコブスは、都市の近隣が、多様性を組み込んだ開放的で流動的なネットワークの重なりであることを伝えようとする。都市は郊外型の近隣と対極に位置する多様な近隣の複合なのである。都市の近隣に関する「逆説」という表現はこのような観点をよく示している。それは、近隣に根をおろした人々を十分に確保するためには、その都市にはそれらの人々が活用する十分な流動性や移動性がなければならないという「逆説」である。都市はあらゆる種類の人間を引きつける機会を持っていること、その機会の活用と選択が自由であることが近隣を開放的にし、かつその安定性を強める関係がこの「逆説」を生むのである。

コミュニティとしての街路という視点は、ペリーの、道路網で区切られた都市の細胞としてのコミュニティという議論を想起させる。だがペリーのコミュニティは、この「逆説」を見ようとはしなかった。それは、自動車の流れによって相互に関係のない小さな孤島に分断された、閉鎖的で同質的な親密圏であった。ジェイコブスは、この種のコミュニティを、コミュニティの「まがいもの」として退け、都市自身が内包する開放性、流動性、多様性を近隣レベルで体現するネットワークを、都市のコミュニティとして取り出そうとしたのである。

また近隣の3層化は、先にも言及したダールの「規模と民主主義」という着想を想起させる。ダールは、民主主義は発生する問題が処理される地理的規模の単位に関連せざるをえないし、大小様々の規模の「入れ子」に似た組み合わせの構想や実現が民主主義の今後に影響を与えると述べていた。ジェイコブスの3層論は、通常、近隣として理解される単位を、街路周辺の流動的であるが安定したネットワークと見なし、それを自治の「入れ子」構造の中で捉えてみようとするアイディアであった。

そして「場所の自治」を作りだす近隣という人間関係のネットワークは、現今の用語を使えば「社会資本」でもあった。『アメリカ大都市の死と生』は「社会資本」が学術的概念として関心と呼びだす以前の著作であるが、そこには「これらのネットワークは、都市の、代替の効かない社会資本である」(ibid., 138)という表現が見られる。

ともあれジェイコブスは、このような議論をすることによって、近隣やコミュニティという用語の意味転換を図り、それを都市の中に取り込もうとしたのである。

おわりに

比較的近年の社会学事典によれば、19世紀の社会学では、前産業社会対産業社会、あるいは農村対都市という対比の下でコミュニティが捉えられ、産業社会や都市社会はコミュニティを解体するものと見なされていた。だがシカゴ学派を嚆矢とする20世紀の社会学は、都市のコミュニティに注目し、「都市とコミュニティ」を都市論の主題の一つにしてきたという(Abercrombie, et al., 2000)。

本稿が試みたのは「都市とコミュニティ」への3つのアプローチを取り出し、相互の位置関係を識別してみることであった。ペリーは、テクノロジーを発達させ、人間を機能的関係の中に組み込んでいく都市だからこそコミュニティの成立が必要かつ可能だと考えた。だがこのコミュニティが、同質的な親密圏や自己決定の理想化として一人歩きするとき、「親密さの専制」が生まれるし、「人間の可能性を経験させる中心」たる都市、あるいは寛容や多様性を包み込む「アーバン・ライフ」という大きな世界から目が背けられる。セネットやヤングは、このことを指摘した。そしてジェイコブスは、都市にコミュニティが成立するとしても、それは農村型のコミュニティではないし、都市そのものの特徴である多様性、開放性、流動性と結びついたコミュニティであることに目を向けようとした。最後にジェイコブスのこのようなコミュニティに関連した話題を2つ取り上げ、

結びに代えておこう。

近年、「犯罪」が都市をめぐる重要なトピックスになりつつある。そして、監視カメラを偏在させ、ホームレスが寝ることを禁止する丸いベンチや、野宿をさせないためのスプリンクラーを設置する施設設計や都市づくりの動向に疑問の声も上げられている。それは「セキュリティ」が一人歩きするときの、都市のあり方への疑問であり問いである(五十嵐, 2004)。M・デイヴィスの描く「要塞都市」ロサンゼルスは、このような「セキュリティ都市」の先駆である。彼は、この街が、豊かな層が活用する「堅固に固められた小単位」と、警察と犯罪者に見立てられた貧困層とが争う「恐怖の場所」に二分された「要塞都市」になったという。セキュリティをデザイン・コンセプトとするポストモダン様式の高層監獄ビルが、貧困層の住空間に建設され、「恐怖の場所」のアパルトヘイト化や「監獄化」が進行しつつあるが、彼が注目するのは、それと表裏して、豊かな層の、物理的にも隔離されたコミュニティ(gated community)が作られているという現実である。一例を紹介すれば、「ミラクルマイル」と称される賑わいのあった公共空間を、高級感のある住宅地につくりかえるために取られた開発会社の戦略は、セキュリティ・フェンスでこの地域を囲い込み、歩行者から隔離することであったし、「コミュニティを囲い込むのが、今の全体的トレンドなんです」というのがこの会社のスポークスマンの言である。ここには都市の「群衆に対する恐怖」やそのような恐怖を生む都市そのものに対して物理的にも閉じられたコミュニティが、「安全」を代償にして肯定されている言説や実践が見られる。さらにいえば、デイヴィスが観察するこの種のコミュニティは、「自己決定」の支持者でもある(デイヴィス, 2001)。セネットのいうように、この種のコミュニティは、「大きな公的世界」たる都市に対して「内から築かれたバリエード」になりうるのである。

これに対するジェイコブスのコミュニティは、街路やその周辺で発生する犯罪の、自然に形成された防止や監視装置であるといつてよい。それは



近隣の人々の生活のリズムが、必要な場合には防犯システムとして機能するコミュニティである。彼女が注目したのは、例えば、毎日、決まった時間帯に窓辺でたたずむ老婦人が、近所で遊ぶ子供を見守り、時には、見知らぬ不審者に気づき、何かが生じた場合は、柔軟で機動的な対応を生み出す、街路のネットワークとしての開かれたコミュニティであり、それは、アパルトヘイトを伴う「要塞都市」を支えるコミュニティ観とは異質である。ともあれ、「犯罪」が都市をめぐる話題になり、かつその話題が、閉鎖的な「セキュリティ都市」へと傾斜しつつ注目されている現況に鑑みれば、コミュニティとしての街路という着想の今日性に改めて目を向けてよい<sup>3)</sup>。

もう一つは、「差異」の承認や「他者」に関連する。G・フラッグは、都市は大都市圏全体の中で十分な法的・政治的力を持っていないという。したがって大都市圏の中で都市の持つ可能性にふさわしい「都市を創ること」(city making)が課題になるという。そしてこの課題は圏内に多様な「コミュニティを創ること」(community making)という課題と重なりとする。そしてコミュニティ創造は、「主体」をどのように捉えるかに関連しているという興味深い議論を展開し、自らの利害を合理的に判断できる「自己中心的主体」(centered subject)、「状況に条件づけられた主体」(situated subject)、「ポストモダンの主体」という各々の「主体」観が、「都市を創ること」=「コミュニティを創ること」にどのような含意と構想を持ちうるかを検討している。さらに、「主体」観を識別する基準の一つに「他者」や「差異」への態度に注目し、「人間は未知のものと会う過程を通じてのみ成長する」というセネットの都市論や、ヤングの「アーバン・ライフ」を、「他者」に配慮した「主体」論として肯定的に参照する。「差異」や「他者」受け入れるコミュニティを創ることは、都市の可能性の拡大につながり、その可能性のためには、都市で生き、活動する人々が、どのような「主体」として想定されているかに、改めて、目を向けてみるべきだというのが彼の主張である (Frug, 1999)。



ルフェーブルは、「都市への権利」とともに「差異への権利」を基本的人権に付け加えるべきことを要請する(ルフェーブル, 2000)。フラッグが注目したのは、セネットやヤングが、このようなルフェーブルの系譜に属するという点であった。だが、セネットとヤングは、都市のコミュニティが「他者」や「差異」の培養器になりうることに目配りをしていないわけではなかった。本章の冒頭で引用したように、ジェイコブスは「しばしば肌の色の違いに由来する差異以上に大きな差異となる近隣間の大きな差異に余地を残しておくこと、これは、密度の濃い都市生活によって可能にされる」という。このようにいうジェイコブスは、「差異への権利」を内包した「都市への権利」への可能性をコミュニティにも見出しそうとしたといえないだろうか。

- 1) 「ハワードの第一の貢献は、調和のあるコミュニティの本質の輪郭を描き、そして不都合に組織された、方向を持たない社会において、調和のあるコミュニティをもたらすためには、どのような段階が必要であるかを示すことであった」(ハワード, 1968: 54)。これは都市について多くのことを語ったマンフォードによる「田園都市」への賛辞である。コルビュジェは、「田園都市」が都市からの逃避志向であることを見たが、マンフォードは、「田園都市」が、都市の中にはなく、その外にコミュニティを作る戦略であったという点で「反都市」の性格を持っていたことには無頓着であった。
- 2) 「都市は、本来、コミュニティからプライヴァシーにいたる段階的秩序によって成立していると考えられる」(芦原, 2001: 157)。都市計画家は、しばしばこのように考えるが、セネットが批判するのは、プライヴェートなものへの親密な関心が「人間的」だとされ、公的なものに対して閉鎖的になるコミュニティの有りようである。あるいは、コミュニティとはプライヴァシーの扱われ方の問題であることを理解しないコミュニティ論が、都市の持つ公共性や可能性を見ようとしていない点である。
- 3) CPTED (Crime Prevention Through Environmental Design) と称される犯罪学の潮流がある。それは、建物の配置、窓の位置、照明等の工夫による「監視性の向上」、車による犯罪者の接近の防止のための歩行者専用道路と車道の関連の工夫、あるいは市民の歩行の自然な流れを作ること等の「動線コントロール」、市民の自発的な諸活動の支援、市民と警察が共同した、落書きや公共施設破壊の事後処理、街区クリーンアップ・キャンペーン等の「防犯意識の向上」の柱で構成される。同じ「セキュリティ都市」を目指しても、CPTEDには「要塞都市」や「ゲイティッド・コミュニティ」とは、別のベクトルが動いていると思われるが、この流れの出発点が、ジェイコブスの「コミュニティとしての街路」というアイデアであることに注目しておきたい(上田, 2004)。

文 献

- 芦原義信(2001)『街並みの美学』岩波書店
- 五十嵐太郎(2004)『過防備都市』中央公論新社
- 上田 寛(2004)『犯罪学講義』成文堂
- 奥田道大「都市コミュニティの再定義」(1999)(奥田道大編『講座社会学・4』)東京大学出版会
- 佐々木宏(1971)『コミュニティ計画の系譜』鹿島出版会
- デイヴィス・M.(2001)(村山敏勝・日比野啓訳)『要塞都市 LA』青土社
- ハワード, E.(1968)(長素連訳)『明日の田園都市』鹿島出版会
- ペーターズ, P.(1978)(河合正一訳)『人間のための都市』鹿島出版会
- ルフェーブル, H.(2000)(齊藤日出治訳)『空間の生産』青木書店
- Abercrombie, N., Hill, S., Turner, B. (eds.) (2000) *The Penguin Dictionary of Sociology*, 4th ed., Penguin Books.
- Bensman, J. and Vidich, A. (1975) *Metropolitan Communities*, New York: Franklin Watts.
- Foucault, M. (1980) *Power/Knowledge*, New York: Pantheon.
- Frug, G. (1999) *City Making*, Princeton University Press.
- Gans, H. (1962) *The Urban Villagers*, New York: Free Press.
- Jacobs, J. (1961) *The Death and Life of the Great American Cities*, New York: Random House.
- Janowitz, M. (1952) *The Community Press in an Urban Setting*, University of Chicago Press.
- Kasinitz, P. (ed.) (1995) *Metropolis*, New York University Press.
- Perry, C. (1998) *The Neighborhood Unit* (Reprinted), Routledge/Thoemmes Press. (倉田和四生訳『近隣住区論』鹿島出版会, 1975年)
- Sennett, R. (1976) *The Fall of Public Man*, Cambridge University Press. (北山克彦・高階悟訳『公共性の喪失』晶文社, 1991年)
- Suttles, G. (1972) *The Social Construction of Communities*, University of Chicago Press.
- Urry, J. (1995) *Consuming Places*, London: Routledge.
- Young, I. (1990) *Justice and the Politics of Difference*, Princeton University Press.